

書評 望月海慧・金炳坤編

『法華経研究叢書Ⅱ 妙法蓮華経優波提舎の文献学的研究』

岡本 一平

一 はじめに

『法華経』研究の世界的研究機関である身延山大学国際日蓮学研究所が、望月海慧・金炳坤編『法華経研究叢書Ⅱ 妙法蓮華経優波提舎の文献学的研究』（略称「本書」）を、二〇二〇年四月に刊行した。編集者の一人、金炳坤博士から書評の依頼を受けて、私は本書の出版を祝い、同時に本書の紹介をお引き受けすることになった。¹ 私は、本書の刊行直前まで本プロジェクトに関する知識も無く、『妙法蓮華経優波提舎』（略称『法華論』）の専門的研究者でもないので、最初、書評の依頼を光栄と感じながらも、責任を果たすことは難しいと判断し固辞させていただいた。しかし、金炳坤博士から本書の概要を拝聴するに至り、本書と私の浅からぬご縁を感じてお引き受けさせていただいた。

ご縁というのは、本書でも活用されている円弘（七三三二年前か）撰『妙法蓮華経論子注』三卷（略称『子注』）の存在である。現在『子注』は、金天鶴博士・金炳坤博士を中心に共同研究が続ぎ、校訂テキストを出版予定である。そして、私は、両博士の研究開始の時点から多少の協力をさせていただいている。² 金炳坤博士が『子注』研究に参加した正確な記憶は無いが、同博士の最初の『子注』に関する発表は二〇一三年一月なので、その直前だったと思う。³ そして、二〇一五年に立ち上がったのが、

本書を世に送り出した『法華経研究叢書』の刊行プロジェクトである（本書、ii～iii頁）。本書における『子注』の果たした役割を知るに及び、『子注』を金炳坤博士へと繋ぐ一端を担ったことに感謝したい。

本書は、望月海慧博士と金炳坤博士の共同編著となっているものの、金炳坤博士は「序」と二篇の論文、資料一篇、合計四篇を寄稿されており、本書全体に金炳坤博士の視点、即ち『子注』の重視が色濃く反映されている。そこで本書評は、『子注』の果たした役割を中心に本書の意義を紹介することにした。

二 本書の目次と意義

まず本書の目次を紹介したい。

序

世親の『法華論』について

金 炳坤

清水梁山国訳『法華論』の底本について—版本『法華論』の流布と受容を視点として—

望月海慧

〈影印〉身延山大学国際日蓮学研究所蔵 叡山版 寛永二年版『法華論』

桑名法晃

〈影印〉身延山大学附属図書館所蔵 坂本日深文庫 正保三年版『法華論』

〈資料〉坂本日深文庫について

沼田晃佑

〈資料〉『法華論』諸本校合（二）

金 炳坤

流支訳『法華論』の流布本について—序品を中心として—

金 炳坤

世親『法華論』の流伝に関する諸問題—見直されるべきテキストを中心として—

金 炳坤

編著者・望月海慧 金炳坤

発行：身延山大学国際日蓮学研究所 二〇二〇年四月一日

総頁：三七二頁

目次からもわかるように、本書は「序」一篇、論文四篇、影印二篇、資料二篇、合計九篇による菩提流支訳『法華論』のテクストに関する最新の研究成果である（以下、金炳坤博士の論文は、横組みの順序に従い「世親『法華論』の流伝に関する諸問題」を第一論文、「流支訳『法華論』流布本について」を第二論文と呼ぶ）。しかも、江戸期の版本（通称「和刻本」）の重要性を知らしめるといふ一貫した目的のために刊行されるものである。その和刻本『法華論』の重要性を知らしめる役割を果たしたのが、『子注』所引の『法華論』である。

本書の意義は和刻本『法華論』の評価、具体的には、菩提流支訳の古形を伝えていることを世に問うたことにある。しかし、江戸期の和刻本の評価ということは、一般的な書誌学の範囲ではなかなか困難なことと思われる。なぜならば一般に書誌学では、版本よりも写本を、写本の中でもより古い写本を尊重する傾向があるからである。このような古い写本を高く評価することは、テキストの伝承の歴史に対応しており、一定の根拠がある。書物の伝承の始まりは、書写にあつたからである。印刷技術が未発達の時代に成立した書物は、書写に書写を重ねてテキストを伝承し、その後、ようやく木版印刷の時代を迎える。中国において仏教文献が本格的に印刷されるのは、開宝蔵（九八三年）を嚆矢とする十世紀後半であり、この段階で大蔵経と呼ばれる翻訳仏典を中核とする一大叢書が印刷され始める。従って、一般に古い写本の方が版本よりも古形を留めていると判断される。しかし、古い写本の方が、近世の版本よりも内容上の価値が高いとは一概に決定できない。もしそのように考えて、近世の版本を軽視するならば、それは大いなる勘違いである。というのも、江戸期の版本といえども、その祖本の内容が古形を留めた善本であることはあり得るからである。裏を返せば、年代の古い写本であっても誤写が多く、その祖本が善本ではないこともある。写本や版本の文化財としての価値と、内容の価値は必ずしも一致するわけではない。例えば、近代において作成される校訂テキストは文化財としての価値はゼロに等しいが、内容の価値はこの上ないものを備えている。つまり、文化財としての価値は古い写本に傾

くことが多いかもしれないが、内容の価値は書写年代の古さを基準にすることは必ずしもできないのである。しかし、言うは易く行は難しい。どちらかと言えば、書誌学は文化財としての価値を評価する技術・学問として発達してきたからである。

私が、本書を高く評価し、同時に知見を開かれた大きな理由の一つは、本書が近世の版本の意義を提起したことにある。現在は、日本で編纂された大正新脩大藏経を筆頭とする各種の叢書を基礎にして、CBETAやSATというデジタルテキストが国際的に流布している時代である。そのような時代に、最も等閑視されがちな和刻本『法華論』の意義を顕彰することは、勇気と知性を必要とする仕事である。そして、その知的な営みが本書として結実した。

三 円弘撰『妙法蓮華経論子注』の活用

先述したように、本書の成立には、円弘撰『妙法蓮華経論子注』（略称『子注』）の果たした役割が大きい。そこで『子注』について簡単に紹介しておきたい。

『子注』全三巻の写本中、正倉院聖語蔵が上巻を所蔵し、称名寺が下巻（半分程度散逸）を所蔵し神奈川県立金沢文庫が管理している（中巻は散逸）。上巻と下巻ともに孤本である。『子注』は、金天鶴博士や金炳坤博士により研究が開始されたものの、翻刻が公開されていないので、研究者の間でも余り知られていない。また作者の円弘についても認知されておらず、著作として『子注』と『円弘師章』（逸文）が知られるだけである。⁴ 円弘の出身は新羅と推定されているが、確定していない。その活動年代は、正倉院（八世紀）に残されている書写の記録から、七三三年以前と推定される。円弘は玄奘訳を参照しているので、その生年は玄奘の帰国年（六四五）を大幅に遡ることもできない。

「子注」という註釈形式は註釈対象（本文＝菩提流支訳『法華論』）を引用した後に、割注⇨子注によって解説を加えるものであり、本文に対して二行取りの細字で付された註釈を「子注」と呼ぶ。従って「子注」はその形式上、本文を後代に挿入するこ

とは難しい。註の部分だけでは「子注」というタイトルも成立しないからである。本文があつてこそ「子注」は成立する。従つて、円弘撰『子注』は菩提流支訳『法華論』の註釈であることから、『子注』に引用される『法華論』も円弘の利用した八世紀前半までのテキストを反映したものと見るのが自然である。

金炳坤博士は、この『子注』所引の『法華論』が菩提流支訳『法華論』の古形であり、和刻本『法華論』はこれと同系統に属するテキストと論証された(本書、金炳坤第一論文、第二論文参照)。そして、この一点が和刻本『法華論』の評価を可能にした。具体的な内容を紹介しよう。

金炳坤博士によれば、『子注』所引の『法華論』には、「経曰婦命一切諸仏菩薩」(略称「婦命頌」)が存在する(金炳坤第一論文、七〇八頁、横)。さらに同博士は、この婦命頌について「十世紀以降の成立である各種大蔵経において、この一文を有する『法華論』のテキストは存在せず、これが八世紀初頭以前の成立である注釈書でしかみられないこと」(本書、iii頁)と指摘する。この婦命頌の有無の指摘こそが本書の要諦であり、『子注』が『法華論』本文の研究に果たした役割である。つまり、金炳坤博士は『子注』所引の『法華論』を基準にして、婦命頌のある菩提流支訳『法華論』を八世紀以前の古形を伝承するものと想定し、その形式に見合うテキストは江戸時代の和刻本と判断されたわけである。このことは、金炳坤博士の第一論文(九頁、横)に図示されており、博士が「流布本」と呼ぶ八世紀以前に流布していた菩提流支訳『法華論』の継承テキストとして、『子注』所引の『法華論』、そして、それを継承したテキストとして江戸時代の和刻本(一六二五年以後)が想定されている。

金炳坤博士に『子注』所引の『法華論』の重要性を知らしめたのは、金天鶴博士である。金天鶴博士は『子注』所引の『法華論』を「第三のテキスト」と呼び、その冒頭の構成を「①婦敬頌+②経曰婦命一切諸仏菩薩(婦命頌)+③如是我聞」(記号①②③と(婦命頌)は岡本補足)とまとめた。金天鶴博士は、『子注』所引の『法華論』を、現行本の菩提流支訳と勒那摩提訳が混ざったテキストのような印象を受けながら、その構成の独自性から「第三のテキスト」と称したのである(金炳坤第二論文、一七頁、横)。金炳坤博士の研究は、金天鶴博士の「第三のテキスト」という提言を受けながら、それを発展させたものである。具

体的には、『子注』所引の『法華論』は、菩提流支訳と勒那摩提訳を混ぜたものではなくて、和刻本の菩提流支訳の祖本に属するテキストであり、さらに八世紀以前に流布していた唯一確実なテキストであることである。

菩提流支と勒那摩提とは、殆ど同時に洛陽で仏典を翻訳し始めたが、両者の翻訳関係が複雑なことは良く知られている。同じテキストに対する翻訳の記録や現物が残っているからである。ここに両者の共訳説等が生まれる。この複雑な問題を解決しながら、和刻本『法華論』を『子注』所引の『法華論』に結び付けたのは、仏教文献学の手本となる見事な成果である。

本書収録の桑名法晃氏の論文の図表によれば、帰命頌の存在する『法華論』は、吉蔵(五四九〜六二三)撰『法華論疏』(略称『論疏』)、円弘撰『子注』、義寂・義一撰『法華經論述記』(略称『述記』)である(本書、二二頁)。

このうち吉蔵撰『論疏』の『法華論』本文は後代の挿入であり、『論疏』の成立時点にあつたものではない。『論疏』の現存最古の写本、天永四年本(一一一三)には、『法華論』本文は存在せず、正徳四年(一一七四)の版本において確認されるという(金炳坤第一論文、八頁、横)。つまり、正徳四年に『論疏』を刊行する際に、本来存在しなかつた『法華論』本文を組み込んで刊行したことになる。詳細な論証と結論は、「序」及び金炳坤第一論文・第二論文をお読みいただきたい。

四 本書に収録された各論文について

望月海慧博士の論文は、前半部分と後半部分に大きく二分される。

前半部分は、中国(十六種)とチベット(十一種)に伝承された世親の経の註釈書を比較しながら概観し、言語圏を異にする巨視的な観点から『法華論』の位置を探求している。望月博士によれば、両伝承に共通して現存する世親の経の註釈書は、『六門陀羅尼經論』と『十地經論』と『伽耶山頂經解説』(漢訳『文殊師利菩薩問菩提經論』)の三種だけであり、『法華論』は漢訳テキストしか現存しない。ただし『パンタンマ目録』(『デンカルマ目録』と同時代の九世紀)には「阿闍梨たちによる著作」として

「七三六『聖法華經釈』阿闍梨ヴァスバンドウ作」、チヨムデンリクレル（一二二七―一三〇五）の目録にも「経疏部の二五番」に確認されると、指摘する。また、中国の元代に編纂された『至元法宝勘同総録』にも「薩怛囉（二合）麻遼怛唎迦沙悉特囉妙法蓮華經論一卷天親菩薩造（中略）二論同本異訳与蕃本同」と記載され、チベット語訳（蕃本）は漢訳二種（二論）と同じものであることを伝えている、と指摘する。そして望月博士は、チベット語訳『法華經論』がプトウン・リンチエンドウプ（一二九〇―一三六四）の目録では、「それらを探すべきである」の項目に位置づけられ、チヨムデンリクレルの目録からプトウン・リンチエンドウプの間に失われたことを示唆する（本書、五―七頁）。

後半部分は、『法華論』を概説しながら、『法華論』の作者が『法華經』の主要テーマを「方便品」に説かれる一乗および声聞授記と考えていたことがわかる」（本書、一六頁）と簡潔にまとめている。

本書は菩提流支訳『法華論』のテキスト研究ではあるものの、そのテキストの古形が復元された暁には、その思想内容の研究に進展するはずである。その際に、世親、あるいはインド瑜伽行派の著作として『法華論』を読む必要があるだろう。東アジアの世親観はインドとは異なり、世親を「一切皆成論」の側に引き入れて読む流れが形成され、『法華論』はそのような人々をも魅了した。インドに起源をもち、世親という偉大な人物による『法華經』の註釈書だからである。しかし、『法華論』の東アジアにおける受容について議論する上で、それを相対化する視点は不可欠だろう。望月論文は、『法華論』を中心に世親の大乗經典の註釈書を概観しているもので、私たちの世親観を問い直す上で、格好の手引きになるはずである。

桑名法晃氏の論文は、タイトル通り清水梁山氏の国訳『法華論』の底本に関する研究である。

清水梁山著『國譯妙法蓮華經優婆提舍』（國民文庫刊行會編『國譯大藏經』論部・第五卷、一九二二年）は、訓読文による『法華論』の最初の紹介であるが、その底本は謎に包まれていた。桑名氏は、その底本が、江戸時代の正保三年の和刻本（略称「正保三年版」）であることをほぼ特定された。

それだけではない。桑名氏は江戸期の四種の和刻本を調査され、寛永二年版（一六二五）↓正保三年版（一六四六）↓藤田宗

継版↓寛文九年版（二六六九）の順序にて刊行され（本書、三〇頁）、正保三年版以後の三種は、「本文・版式はすべて同じ、（中略）刊記は異なるものの、その部分のみ埋め木していることから、三つとも同じ版であることがわかる」（本書、二八頁）と指摘された。そして、この寛永二年版を嚆矢とする四種の和刻本は、「嘉興蔵の覆刻である鉄眼版が大蔵経として近世の日本では流布していたが、一方ではそれとは構成・本文を少し異にする菩提流支訳の版本『法華論』が、（中略）寛永二年版以降覆刻され、刊記を変えて繰り返し刊行されていたことがわかるのである」（本書、三〇頁）と、まとめられている。

近世における大蔵経収録のテキストとは異なる系統の菩提流支訳『法華論』の調査だけでも、大変な時間と労力を必要とする。しかし、ここに一つのアイデアが挿入されることにより、その調査の意義は飛躍的に変化をもたらした。それは『子注』所引の『法華論』Ⅱ八世紀以前に流布していたことが確実視される菩提流支訳の古形を、これら四種の和刻本が継承していることである。つまり、桑名氏による四種の和刻本の調査は、日本近世における『子注』所引の『法華論』と同系統の出版史としてそのまま読めるのである。おそらく『子注』の存在なくして、和刻本のテキスト上の意義を顕彰することは困難だったと思われる。

桑名氏は金炳坤博士との共同研究「義寂釈義一撰『法華経論述記』の文献学的研究(1)～(4)」(『身延山大学仏教学部紀要』第一五号、二〇一四年一〇月、『身延論叢』第二〇号、二〇一五年三月、『法華文化研究』第四一号、二〇一五年三月、『身延山大学仏教学部紀要』第一六号、二〇一五年一〇月)を公刊されており、その第一論文において、すでに『法華論』の冒頭の構成に関する一覧表を作成されている(本書、二二頁)。この一覧表中、和刻本と同じ構成で、第二番目に帰命頌「経曰帰命一切諸仏菩薩」が存在し、なおかつ現存するものは、『子注』巻上所引の菩提流支訳『法華論』だけである。吉蔵撰『法華論疏』所引の『法華論』は後代の挿入、義寂釈・義一撰『法華経論述記』は帰命頌を第三番目にもつテキストである。つまり、『子注』所引の『法華論』のみが和刻本と同一の構成で帰命頌を有する。おそらく『述記』↓『子注』↓和刻本という流れで、桑名氏の研究は進展したものと推定されるのである。

影印二篇は、叡山版・寛永二年『法華論』(身延山大学国際日蓮学研究所蔵)と、正保三年版『法華論』(身延山大学附属図

書館所蔵 坂本日深文庫)を収録している。桑名論文によれば、前者は和刻本『法華論』の先駆け、後者は、正保三年版↓藤田宗繼版↓寛文九年版と続く、同一版型の最初の版本である。金炳坤博士の「序」によれば、叡山版・寛永二年版は「稀覯本で世に指折りの数しか現存しない」(本書、i頁)テキストである。本書収録の二篇の影印は、版本にアクセスすることが困難な国内外の研究者のために多大な利便性を提供している。

両版本の書誌情報については桑名論文(二四頁、二九頁)に詳しい。桑名論文ではあまり強調されていないものの、和刻本の先駆け寛永二年版(一六二五)は叡山版である以上、おそらく叡山に伝承されていた古写本『法華論』を底本にして開版されたと推定される。それは『子注』所引の『法華論』と同系統に属す。影印二篇は、今後の『法華論』研究の基礎文献といえる。

沼田晃佑氏の資料は、正保三年版『法華論』を所蔵する身延山大学附属図書館の坂本日深文庫の紹介である。沼田氏の丁寧な紹介により、私は坂本日深文庫が、坂本幸男博士(一八九九〜一九七三)の蔵書一万冊の寄贈により誕生したことを始めて知った。坂本博士は、私もその末端に連なる華嚴思想研究の偉大な先人である。博士の『華嚴教学の研究』(平楽寺書店、一九五六年)は、中国の静法寺慧苑の思想を中心しながらも、その研究の範囲は地論宗、さらに新羅の華嚴思想にまで及び、この分野の古典的名著となっている。私も現在でも度々参照させていただいている。今回、その蔵書一万冊の概要を知り、身の引き締まる思いをした。特に和漢古典籍、計八六三部の蔵書を知り、坂本博士の学問が江戸時代に至るまでの仏教の豊穡な知識を、近代仏教学へと継承している側面に気づかされた。本書を介して、坂本博士が所蔵された正保三年版『法華論』の影印を拝見する機会に恵まれたことを、沼田氏、並びに身延山大学附属図書館関係者に感謝する次第である。また、沼田資料に加えられた編者・金炳坤博士の付記によれば、正保三年版の購入の年月日と坂本博士の年齢が記されている。

金炳坤博士の論文二編と資料一篇については、すでに言及してきたので簡単に紹介したい。

金炳坤第一論文は、菩提流支訳『法華論』の古形(八世紀以前の流布本)が、『子注』所引の『法華論』であることを論証している。そして、『子注』を基準にして、『法華論』の古形の復元を予告されているので、これについては大いに歓迎したい。ただ

し厄介な問題は、『子注』は中巻と下巻の一部が散逸しているので、その散逸部分をどのように想定するのか、という難問が残っている。そして、本第一論文の若干の問題点を挙げれば、流布本という表現である。流布本は、主に「現在一般に利用されるテキスト」を指す言葉だと、私は考える。例えば、仏教研究者であれば、大正蔵も流布本に入る。しかし、金炳坤博士は「時代ごとに流行する流布本」（本書、一二頁、横）というような使い方をされている。この用法では、あらゆるテキストが流布本になつてしまわないだろうか。無論、八世紀以前に流布していたテキストを「流布本」と呼ぶことも間違いではないかもしれないが、誤解を招く表現と考える。

金炳坤第二論文は、『子注』所引の『法華論』について、金天鶴博士が提起した「第三のテキスト」という問題を解決するために、「序品」を対象として十二種の『法華論』と比較したものである。十二種のテキストの概要も整理されているので、『法華論』の諸本について知りたい人への便宜も図られている。比較の結果、和刻本『法華論』との一致が高いことを論証された（本書、一九頁、横）。同時に、和刻本に依拠するテキストについても指摘している（本書、一二二頁、横）。

金炳坤資料は、金炳坤第二論文「二『法華論』諸本校合（一）」（本書、二五〇―二一九頁、横）で比較された『法華論』「序品」十二種をクロスチェック用に再編集したものである。異読の存在する部分だけ太字で表記していることに特徴がある。「経曰帰命一切諸仏菩薩」＝帰命頌の部分の比較では、一目で和刻本（正保三年版）と、その関連テキストのみしか存在しないことが判明する（本書、一五五頁）。比較自体は単純な作業であるかもしれないが、アイデア・調査・作業時間を考えれば余人が簡単に真似できるものではない。

五 課題と展望

本書の課題は、今後、『法華論』研究者たちからの評価という点にかかっている。本書は、大学の所属研究所の研究成果とし

て世に問われた以上、今後は学外の多くの研究者たちによって、その成果が議論されることが期待される。本来であれば、批判的な観点からも書評することが研究者の務めであることは承知しているが、それは私の能力の限界を超えているので、私自身の今後の課題とさせていただきます。

今後の展望として、金天鶴博士と金炳坤博士の共同研究である『子注』の校訂テキストの公刊が必要となるだろう。幸いにして、金天鶴博士の御努力により、関係各位との協力も順調に進んでいるとお聞きしている。『子注』の公刊は、『法華論』註釈史に新しい道を開くことになるはずである。

本書は、現時点における菩提流支訳『法華論』に関する文献学的研究の到達点である。『法華論』研究者だけでなく、文献学者、あるいは文献学を志す人たちにも是非読んでいただきたい。

最後に、本書に寄稿された方々のご健康と、身延山大学国際日蓮学研究所の益々のご発展を願い、筆を擱く。

付記

本書刊行後、浅野学「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」（『印度学仏教学研究』第六九卷第二号、二〇二一年三月）が公表された。

本浅野論文は、興聖寺所蔵の『妙法蓮華経憂波提舍』の写本一点、版本一点を紹介するものであり、その紹介に際して、本書のうち金炳坤論文と桑名法晃論文の成果を参照している。浅野論文は、おそらく本書の最初の反響であり、私としても歓迎したい。

ただし、参照の仕方として残念ながら問題が残る。というのも、本書において金炳坤博士と桑名法晃氏は、菩提流支訳『法華論』の古形（八世紀以前）を想定する上で、『子注』を基準にして和刻本の意義を提起した。しかし浅野論文はこの問題提起を紹介しないまま、興聖寺所蔵のテキストについて「唐代の正統な大蔵経系統に当たるテキストであるか否かを選択するにあたって有力な資料であろう」（九〇頁）と結んでいる。この結びの言葉は、残念ながら本書の研究成果を具体的に参照しているとはいえない。第一に「唐代の正統な大蔵経」が何を意味するのか、わからない。また大蔵経は「権威」であっても、その収録されたテキストは「正統」とはいえない。第二に、本書で想定された菩提流支訳『法華論』の古形（八世紀以前）は、少なくとも中国の各種大蔵経成立以前の形態を問題にしている。第三に、興聖寺本は『子注』や和刻本の系統とは一致しない。興聖寺所蔵写本には帰敬頌が無く、版本の帰命頌は「経曰」のみだからである。第四に、第三の問題から興聖寺所蔵の写本と版本自体も異なる系統に属するので、両文献を一緒に扱うことは困難であり、個別の検討が必要である。第五に、写本は院政期、版本は鎌倉期と想定されているが、その根拠が明示されていない

いし、「善本」としての根拠も提示されていない。「善本」の判別は、興聖寺本の本文を、金炳坤博士や桑名氏が行った『法華論』本文の比較の成果を活用する必要がある。

浅野論文が紹介するように、興聖寺の写本と版本は多くの興味深い内容を備えた貴重な文献であるかもしれない。しかし、本書が刊行された以上、本書の問題提起を批判、追認、部分修正などの明確な立場を取らない限り、興聖寺本の文献学的な位置づけは困難であろう。興聖寺本の意義を顕彰するためにも、今後、そのような方向性を期待したい。

同時に、金炳坤博士や桑名氏は、興聖寺所蔵の写本や版本について本書の立場から位置づけが求められる。

【註】

- 1 私が金炳坤博士から書評の依頼を受けたのは、二〇二〇年五月末日のことである。
- 2 岡本一平「田弘撰『田弘師章』の逸文研究」(『身延論叢』第二五号、二〇二〇年三月) 四〇頁参照。
- 3 金炳坤「田弘撰『妙法蓮華經論子注』研究史概観」(『身延論叢』第二五号、二〇二〇年三月) 九七頁、発表^④参照。『身延論叢』第二五号は、金炳坤博士の編集により、「田弘と妙法蓮華經論子注」という特集が組まれているので参照されたい。
- 4 田弘の関連論文の所在は、すべて前掲金炳坤論文(前註3)に収録されている。
- 5 浄影寺慧遠(五二三〜五九二)の『大乘義章』卷第三「四縁義」中に「如彼『雜心子注』釈言。欲界生得、強而捷利故」(大正四四、五一八下)とある。
- 6 奥野光賢博士は、本書の刊行に若干先行して、別途、末光愛正氏・清水梁山氏・中井本勝氏・桑名法晃氏の研究を整理しながら、吉蔵撰『法華論疏』所引の『法華論』について考察されている。是非参照されたい。奥野光賢「三論宗関係論文の本文問題」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第七八号、二〇二〇年三月)。
- 7 ただし中国における『法華論』の初期の受容者は、達摩罽多羅(法上、四九五〜五八〇)撰「釈教迹義」や、慧遠(五二三〜五九二)撰「勝鬘義記」であり、二人とも決定声聞は、大乘に転向しないと理解している。岡本一平「浄影寺慧遠の二蔵説の形成―達摩罽多羅「釈教迹義」と慧遠『勝鬘義記』―」(『東洋学研究』第五四号、二〇一七年三月) 参照。
- 8 特に、前掲奥野論文(前註6)が提起した問題については、改めて具体的な応答をお聞きしたい。